

男性学セミナー

講師 田中俊之氏

男女共同参画社会を推進するうえで、女性だけでなく男性の新しい生き方も考えなくてはなりません。2月11日(土)、男性学の第一人者としてテレビや雑誌等で活躍中の田中俊之先生をお招きし、男性視点でのジェンダー学、男性学についてお話しをいただきました。

現在の日本では、経済構造や雇用環境の変化から、男性人の収入だけでは家計を支えきれず、女性も働かなければならなくなっています。家事や地域活動は、これまでその多くを女性が担っていました。女性が職場に進出するのであれば、その分、男性が地域や家庭に戻らなければなりません。しかし日本では、男性の長時間労働が当たり前で、男性がもっと家事や地域活動をしようというのとは不可能です。



田中俊之氏

プロフィール

大正大学心理社会学部准教授。博士(社会学)。社会学・男性学・キャリア教育論を主な研究分野とする。

著書として、『男が働かない、いいじゃないか!』(講談社プラスα新書)、小島慶子×田中俊之『不自由な男たち—その生きづらさは、どこから来るのか』(祥伝社新書)ほか。

「日本では“男”であることと“働く”ということとの結びつきがあまりにも強すぎる」と警鐘を鳴らしている男性学の第一人者。

男性学とは、男性が男性であるがゆえに抱える悩みや葛藤を対象とした学問です。男性の抱える問題の一つに働き過ぎが挙げられます。現在、働き方改革が話題です。建前では、男性も残業を減らして、家庭や地域に参加しようと言いますが、本音では、男性は働きすぎているくらいがちょうどよいと、長時間働く男性を安心して見ていないでしょうか。また、男性学には「平日昼間問題」という言葉があります。現役世代の男性が、平日昼間に街中を歩いていると、「まともな男なら働いているはずだ」という意識から、不審に思われてしまうという問題です。いずれも原因は、日本では男であることと働くこととの結びつきがあまりにも強すぎることにあります。主婦がいても働く女性がいてもいいし、働く男性がいても大丈夫がいてもいいはずですが、個人の個性ではなく、その性別だけで生き方を二つに分けるのはおかしい事ではないでしょうか。

日本では男女の賃金格差がまだ大きな問題として残っています。賃金格差がある状況

では、男性が一家の大黒柱にならざるをえませんが、例えば、家のローンを組んでしまったら、男性は定年まで仕事を辞めずに働き続けなければ

いけません。男性は変わらないのではなく、変わることができないのです。男女共同参画社会を女性のためのものだと考えている人も多いようですが、男性の生き方の多様性を広げることでもめるのです。

例えば仕事が多様な楽しんでも、いつかは終わりが来ます。地域に友人がいないと、定年後に居場所を失ってしまう事になります。日本での社会人とは、企業で正社員として働いている人を指す言葉になってしまっていますが、社会には、仕事だけでなく、地域や家庭、個人の領域がそれぞれあるはずですが、これらをトータルに考えて社会と呼び、それらのバランスがとれている人を社会人と呼ぶべきだというのが私の提案です。

